

遠浅酪農が始まったときって どんな時代？

昭和5年（1930年）ごろは、アメリカを発端とした世界恐慌の真っ只中。日本もこの世界情勢の煽りを受け、経済は思わしくない状態に。

この後に紹介する内容は、
厳しい経済状況に屈すること
なく歩み続けた、遠浅酪農の
歴史です。



厳しい中での船出 どう酪農を進めていったのか

昭和5年に入植し、そこから約3年
もの間は、共同で開墾を進めていった。
そして、右記にも記した経済不況は
遠浅酪農にも影響を与える。経済だけ
ではなく、飼料作物の収量も天候に恵
まれず思うように行かない時期が数年

にわたり続いた。

乳牛は240頭（1戸あたり8頭程
度）から遠浅酪農が船出。しかし、入
植初年度から感染症により10数頭を失
うという打撃を受けた。

それでも牛乳の生産を絶えず行っ
た。当初は生乳を流通させていたが、
当時の技術では長い時間品質を保つこ
とができず、廃用品になってしまいうこ
ともあった。

次第に流通の仕方も変わり、搾乳し
た生乳を分離し、クリームを製造。そ



遠浅公民館の敷地内にある碑。
裏面には、工場建設からの流れが彫り込ま
れている。

どんなチーズが 作られていたのか？

工場が建設された昭和8年当初は、ゴード
チーズやエダムチーズといった、オランダを代
表するチーズの製造が行われていました。

その後、ブルーチーズなど製造するチーズの
種類が少しずつ増えていったそう
です。



のクリームを奈井江にある工場に汽車
で運んでいた。その後、昭和8年には
早来市街地に奈井江と同様の工場がで
き、馬車にて運搬した。安平村の中
は早来だけでなく遠浅にも工場が建設
される予定であったが、実現せず。
しかし、昭和8年8月にチーズの製
造を行う工場棟が遠浅地区に建設され
た。このチーズ工場こそが、日本にお
ける「工場生産チーズ発祥の地」とし
て紹介されてきている。